

「コロナが教えてくれたこと」

鹿児島市立喜入小学校 五年

岩元 いわもと 大知 たいち

「きつい。」

一学期のある日、ぼくは頭がいたくなかったの
で、保健室に行きました。体温を測ってみる
と、熱はありませんでした。そのため給食を
食べに教室にもどり、給食を食べると元気に
なり、元気いっぱい昼休みに遊びました。し
かし、遊んでいるとまた頭がいたくなってい
たので、保健室に行きました。体温をはかっ
てみると、今度は熱がありました。ぼくは、
さつきまで平熱だったのにとびつくりしまし
た。保健室のベッドにねていると、お父さん
がぼくをむかえに来てくれました。

家に帰ってくるとすぐに、自分の部屋に行
ってねました。三十分ぐらいねました。起き
て体温をはかってみましたが、あいかわらず
熱は高いままでした。ぼくは、新型コロナウ
イルスにかかったのではないかと心配になり
ました。

次の日、PCR検査を受けに病院へ行きま
した。検査結果を待つ間、ぼくの心臓のどき
どきは止まりません。結果は、陽性でした。

その日から十日間の自宅待機が始まり、始
めて一人でご飯を食べるといふ経験をしまし
た。おいしいはずのご飯が、家族のみんなと
食べられなかったもので、なんだかおいしくな
く感じました。ご飯を食べ終わって、ひまな
時間がやってきました。するとお父さんが、
お仕事の帰りにマンガを買ってきてしてくれま
した。マンガのおかげで、今までひまだった時

間がなくなりました。しかし、あつという間

に全部のマンガを読み終えてしまいました。

そのため、何度も何度も読み返しました。そ
の後、五日間で平熱にもどり、七日間でだる
さがなくなり、食欲も出てきました。そして
自宅待機最終日、ぼくは明日のことを考える
とわくわくしてきました。

「明日は家族といっぱいお話ししよう。」

「明日のご飯は楽しみだな。」など、いろい
ろなことを考えながらねました。

次の日、リビングに行き、
「おはよう。」

と言いました。家族との久しぶりの再会です。
みんなと食べる朝ご飯は、今までで一番おい
しいと思えるご飯でした。

最後に、とてもきつくてひまで、もう二度
とかかりたくない新型コロナウイルスですが、
新型コロナウイルスがぼくに教えてくれたこ

とが一つあります。それは、何げない日々の
幸せです。学校に行つて友達と会うこと、家
族といっしょにご飯を食べること、宿題や習

い事でいそがしいことは、コロナにかかる前
までは普通のことだと思っていました。しか
し、コロナを経て、これらはとつても幸せな
ことなのだと思付きました。よってこれから
はこの幸せを守るためにも、今まで以上に手
洗いや手指の消毒、マスクの着用を心がけよ
うと思います。